

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：12102
研究種目：奨励研究
研究期間：2022～2022
課題番号：22H04416
研究課題名 指導者の意図とイメージ共有状況の実態を把握するスポーツ指導言語のデータベース化

研究代表者

栗原 翔吾 (Kurihara, Shogo)

筑波大学・URA研究戦略推進室・リサーチ・アドミニストレーター

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 450,000円

研究成果の概要：本研究成果は、サッカー、武道指導者の指導言語を取得し、指導者の発話する特徴的なことばを抽出した。指導者へのインタビューを通し、特徴的なことばの背景意図やニュアンスを明らかにした。加えて、スポーツリハビリ上で言葉を介する指導者・学習者の相互作用に着目し、学習者にどのような相互作用における知の変遷があるかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義と社会的意義は、スポーツ・武道指導上における曖昧な状況下における指導言語のニュアンスの違い等事例を用いて明らかにした。また、リハビリ上の学習者視点による日記的文章の蓄積から指導者・学習者の相互作用に基づく知の蓄積の有用性について示唆を与えた。

研究分野：スポーツコーチング

キーワード：スポーツ コーチング 指導言語 指導者 学習者 相互作用 リハビリ

1. 研究の目的

- (1) サッカー、武道指導者の指導言語を取得し、指導者の発話する特徴的なことばを抽出する。その特徴的なことばについて、指導者へのインタビューを実施し、ことばの背景意図やニュアンスを明らかにする。
- (2) 指導者 学習者の状況であるスポーツリハビリ上で言葉を介した指導者 学習者の相互作用に着目し、学習者にどのような知の変遷があるかを明らかにする。

2. 研究成果

- (1) (1) 外来語に着目し、サッカー指導者に以下項目についてインタビューを実施し、使用実態と分類例を明らかにした。

対象語の直感的な解釈、 対象語の使用状況、 具体的な使用状況を想定した時の自身の物理的な立ち位置、 対象語の発話によって選手に期待する変化、 他の人による対象語の解釈

(1) - (2)【使用実態】の把握：

1 アクション	140	12 サーバー	87	23 ファースト	47	34 スペース	29
2 テンポ	129	13 サポート	83	24 ダイレクト	46	35 ハイ	28
3 ラスト	123	14 アンダー	80	25 スピード	45	36 フラット	28
4 タイミング	121	15 タッチ	77	26 センター	42	37 スロー	27
5 バック	112	16 プレー	76	27 アウト	37	38 プレス	27
6 ライン	109	17 コンパクト	75	28 ゲーム	37	39 トップ	26
7 パス	107	18 ツー	71	29 ハーフ	37	40 ターゲット	25
8 スイッチ	106	19 ポジション	70	30 ファウル	35	41 グリッド	24
9 イメージ	105	20 フリー	67	31 クローズ	33	42 スライド	21
10 シンプル	96	21 シュート	60	32 コーナー	31	43 トライ	21
11 セット	96	22 リスク	49	33 プラス	30	44 ミス	20

表 1：頻度 20 回以上の外来語

(1) - (3)【外来語の分類例】

- ・ 評価語：オーケー、グッド、ブラボー（上記表外）
- ・ モノ名詞：ゴール、キーパー、ピブス（上記表外）
- ・ 個人技能に言及する語：パス、クローズ（クロス）、ダイレクト
- ・ チーム戦術に言及する語 時間の空間移動に言及する語例）「テンポ」「リズム」（酒井・栗原・齋藤・原仲（2021））
- ・ 空間的移動に言及する語：スライド等

(1) - (4)【「スライド」の深堀の実施：指示内容発話場面】

いつ：守備場面・相手のボールが移動したとき
 誰に：ボールに直接かかわっていない複数の選手
 どのような：「コンパクトな状態」のまま守備位置を変更する
 イメージ：全体よりも、個々の人の動きに対して

(1) - (5)【「スライド」と類義語「縦ズレ」・「プッシュアップ」との比較】

- ・ 縦の「縦ズレ」「プッシュアップ」 ...チーム戦術
- ・ 横の「スライド」 ...チーム戦術ではあるが、個々の人のアクションとして着目される。

この結果から以下の点が示唆される。

- ・ 組織化において、指導者は「縦」は「チーム全体」と「横」は「個人」の裁量が多い

と認識していることが示唆される。

- ・ 「スライド」の「横」の概念は、無標性（一般性が高い）である。
- ・ 「縦ズレ」等は有標性（一般的でなく特異的）である。

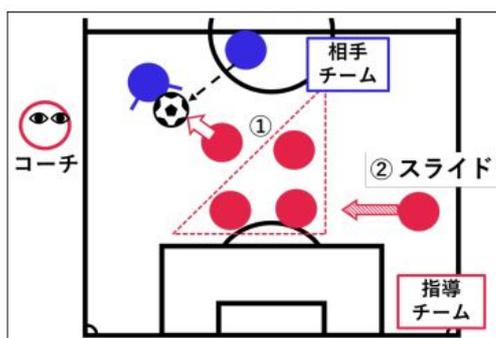


図1 「スライド」のイメージ

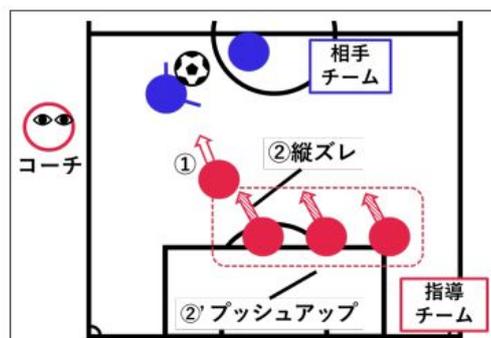


図2 「縦ズレ」「プッシュアップ」のイメージ

(2) (1) 上記研究の目的(2)の事項について、リハビリタスク実施中に当事者である学習者への半構造化インタビューを実施し、指導者と学習者との相互作用における言説分析を実施した。学習者は以下のような認識の変遷が生まれていた。

○リハビリ初日：

- ・ 距離感・位置感覚の感覚誤差
- ・ 患部の：痺れと感覚の欠如
- ・ 「痛み・痺れ」の変遷の理解
- ・ 「力の入れ方」の理解の意味付け
- ・ 「痛み・痺れ」「力の入れ方」の「再現性」の確認

○リハビリ3週間後：

- ・ 「痛み・痺れ」の言語表出の減少
- ・ タスク動作技術に対する言語表出の増加

学習者が上記内容を言語化することによって、「痛み・痺れ」と「力の入れ方」の連結への意味付けと自己納得感を得られた。この納得感は、動作獲得へのポジティブ作用が生まれたと推測された。

今後、リハビリ当事者の日記的文章等や、リハビリ過程における客観データと学習者である当事者が言語表出分析を照合することにより、学習者の理解や進捗度を確認する過程となる。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 栗原翔吾、酒井晴香、原仲碧
2. 発表標題 サッカーコーチングにおける外来語の使用実態 発話分析とインタビューに基づくコーチング初学者のことばの解釈事例
3. 学会等名 日本コーチング学会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 栗原翔吾
2. 発表標題 左腕橈骨粉碎骨折後の感覚遷移 社会人サッカー選手のオートエスノグラフィ日誌手法とオンラインリハビリ上の指導者－学習者の相互行為の言説分析から－
3. 学会等名 日本コーチング学会
4. 発表年 2023年～2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
酒井 晴香	(Sakai Haruka)
原仲 碧	(Haranaka Midori)
大門 勇登	(Daimon Yuto)
大庭 良介	(Ohniwa Ryosuke)